(社)島根県建設業協会出雲支部青年部会 視察研修旅行 報告書

昭和開発工業㈱ 荒木 克之

2月29日(金) 伊丹空港～鹿児島空港～知覧(ホタル館･知覧特攻平和会館)～指宿温泉(白水館)
3月 1日(土) 指宿温泉(白水館)～鹿児島市内観光～鹿児島空港～伊丹空港～大阪市内
3月 2日(日) 大阪市内観光～伊丹空港～出雲空港～解散

知 覧

鹿児島空港よりバスで出発、すぐに高速道路に入って南下し、鹿児島市方面を目指しました。見えてくる景色は台風が多いためか平屋建ての住宅が多いくらいで、山並み、まちの雰囲気はさほど島根県と大差ない印象を持ちました。高速道を降り一般道へ入ると、左手に鹿児島湾が見えてきました。しばらく走るとくねくねと山道を登り、指宿スカイラインという、名前の通り小高い台地の上を走る道路に出ました。大きく広がる緑の台地は爽快で、ここで初めて南九州に来たなと感じました。のどかな景色を楽しみながらバスは山道を下り、目的地知覧に到着です。

知覧は山の懐に抱かれた小さなまちでした。東西に伸びるメインストリートを皆で歩きながら散策し、ホタル館富屋食堂に到着しました。小さな入口から中に入ると、そこには特攻隊員の遺書や出撃前の様子、軍服など様々な資料が展示してありました。先ほど中に入るまでは談笑していた皆さんも次第にひそひそ声。目に涙を浮かべながら、じっと資料に見入っています。20歳前後、中には17歳の若者が国を守るため、家族を守るために「特攻」して米軍の戦艦に体当たりした現実は無条件に心にしみてきます。あちらこちらから聞こえてくる鼻をすする音が命の尊さ、命の厳粛さ、そして散った命の不憫さを表していたと思います。

よく建設業界の未来を揶揄して、明日が見えないといったことを言いますが、こうした明日の国のために戦われた先人を目の当たりにすると、背筋が伸びる思いです。この時代を思うと現在は厳しい時代と言えまだまだぬるい、もっともっと頑張らなくては…と熱くなったひとときでした。

指宿「白水館」

バスは知覧を出て一路、指宿温泉を目指します。山間の道を看板の標識を便りに走ると、道路いっぱいに広がる赤い物体。右手に停車しているトラックから落下した人参でした。知覧を出て間もなくの引き締まった状態だったためか、すぐさまバスを飛び出して何十個と転がっている人参を数名が片付けました。さっそく研修効果？が現れたひとコマでした。

鹿児島でも地域貢献！

申し訳なさそうに人参を箱に入れ直す運転手を横目にバスは再び指宿に向けて出発します。しばらく走ると歩道に灯篭が立ち並ぶ道路へ…白水館に到着しました。これがまた驚いたことに、敷地内は広くて、きれいに手入れが施され、玄関に着くと出迎えられました。ロビーではただただ「へぇ～」と感心して辺りを見渡すばかり。すぐに思ったのが一泊いくらかな？でした。砂風呂、露天風呂と温泉を堪能した後は大きな目的のひとつ、会員相互の交流の懇親会です。並べられる料理も立派なもので、上手い食事、汗をかいた後の酒、そして皆さんとの会話と大いに盛り上がった懇親会となりました。懇親会～２次会と大騒ぎした後、やはり気になるのが当地のまちなみ。２名で夜の指宿市内、本場の鹿児島弁に触れたく散策に出掛けました。全国的な知名度、また温泉街のイメージから、さぞ賑やかな通りがあるのかと期待して繰り出すと、全くひとけのない通りでタクシーから降ろされました。温泉も飲み屋もてんてんとあるだけで、歩いている観光客は我々のみ。大きく当てが外れたので居酒屋に入り、２人とも指宿市長になってまちづくり談義。楽しい夜を過ごせました。

大阪においては各々で観光をし、食い倒れ、お笑いを堪能しつつ夜になると全員揃っての懇親会。こちらでも大いに盛り上がり、皆さんとの懇親を深めることができました。今回の視察研修では、２泊３日の限られた時間ではありましたが、会員相互の交流を深められたこと、初めて訪れた地の上手いものを食べ、地元の人と会話をし、そしてまちなみを歩けたことは大変貴重な経験となりました。そして知覧で感じたあの熱い感動、今後さらに私たちの業界は厳しさを増すことと思いますが、しっかり頑張っていこう、そう思える研修となりました。最後に富屋食堂のおかみで特攻の母と呼ばれた鳥浜トメさんの言葉で終わりたいと思います。

一つしかない命を投げ捨てて
散っていった
若者達のこと…
忘れてはならない　鳥浜トメ

第10回
「国道まるごと クリーンアップ作戦」に参加して

㈲山根建設　山根　　強

今年も斐川町の道の駅で全体の出陣式がありました。平井組の平井専務さんの掛声でガンバローコールを行い、気合をいれて各区間へ向かいました。私は数年来、久村交差点から市役所の多伎支所までの区間を担当しています。左右の歩道をふた手に分かれてゴミを拾って歩きましたが、ゴミの量は年々少なくなっているように感じました。しかし、量が少なくてもゴミを捨てている人がいるということには変わりはありません。我々の活動を目にした人が少しでも公共心や自然環境を大切にする意識を持って頂ければと思います。

私自身もこの活動がなければ国道沿いを歩くことなどなかったと思います。普段、車の移動では見えないものが実際に歩いてみるとこんなにゴミが落ちているということを知りました。誰もが使う道路（公共の場所）であり、我々の先輩が苦労して造られた道路なので大事にしなくてはいけないと改めて感じましたし、子供達にもしっかり教えていかなければいけないと思いました。

僕は、カブトムシ

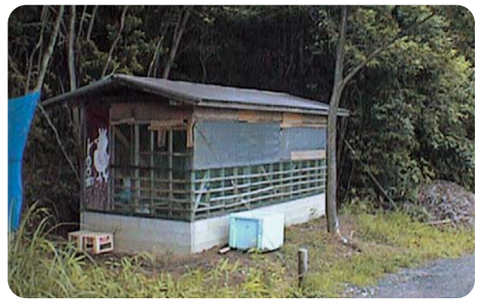
㈲西尾組　西尾　　仁

小学校１年生の頃、本に興味を持たせようと親が、図鑑を買ってくれました。その中で、ひときわ目を引いたのが、赤茶色につやつやとして、鋭い角を持った虫、カブトムシだったのです。それからというものは、カブトムシの本ばかり読むというか見ていましたが、そのうちだんだんと実物が欲しくなっていき、居ても立っても居られなくなり、遂にやってしまったのです。それは、山や畑が多い所に住んでいたので、至る所に畑に使う堆肥（牛のう○こ）が有り、素手でう○こまみれになりながら、ほじくって幼虫を捕まえていました。当然、掘りっ放しで帰るので、よく叱られていました（またあんたかねー）と。

そして夏になると、成虫を捕りに友達と山へ行き遠目で山を見ながら、あそこの木があやしいと思ったら、どんなやぶでも、木の上でも、カブトムシ目掛けて突進し必ずゲットしていました。そして家の水槽では何十匹も成虫に育て、友達に大人気で、そんな僕は昆虫博士と言われていました。

最近では、仕事としてやっている木材のリサイクルチップを利用して、自然繁殖させ幼虫の時に捕獲し、専用のカブトムシハウスに入れておきます。そうすると夏には成虫がいっぱい出てきて、そこでカブトムシとたわむれています。（しあわせ）

ですが、近頃自然の木にカブトムシが来ているのをあまり見ませんし、そうした場所が少なくなった様に思います。いつかは、カブトムシが沢山いる森、そして子供達がカブトムシと触れあえるそんな森を作れたらいいな。



強い心と強い体を

山本工業㈱　花田　昌彦

昨年、私が監督を務めます北陽メッツが全国大会（大鳴門橋学童軟式野球大会）に出場いたしました際には、会員の皆様方からあたたかい激励、ご支援を頂きましたことをこの場を借りましてお礼申しあげます。

私が北陽メッツの監督に就任し、早や９年の月日が経ちました。社会人野球をしていました私が、今の団長、保護者の皆様から監督の話があった時は、とまどい、不安もありました。野球技術や勝負へのこだわりは社会人野球で培った自信もありましたが、教える相手が小学生となると、教育が重要であると感じていました。

引き受けた当時は、なかなか勝負の結果が出ませんでしたが、野球以前に、『あいさつ・礼儀・整理整頓』は徹底的に教えていきました。

考えてみれば、教えると同時に、私自身もその大切さを再確認し、さらには、子供達から逆に教えられることも多く、その責任の重さを強く感じるようになりました。

私のモットーは、**「強い心と強い体を」**です。

その意味は、人にやさしく思いやりを持つ、自分に厳しい、そして妥協を許さず向上心を持つ、その上で丈夫な体をつくっていくことですが、昨今の青少年のさまざまな事件を報道で耳にするたび、あらためて【心の健康】の重要性を感じています。

そんな中で、青少年育成の一端を担う機会を与えていただいた事に感謝をしながら、私自身も常に向上心を持ち、子供達から信頼される指導者であり続けられるようがんばっていきたいと思っています。

また、スポ少では、地域の人々をはじめ、多くの人にご協力をいただいております。何もなかったグラウンドに、今ではバックネットを始め、立派な本部席、照明設備など、さまざまな人の力で整備されてきました。

こういったみなさんからの協力や人とのつながりも、将来子供達の宝物になるものであると教えていきたいと思っています。

「目的は青少年の健全育成、目標は全国大会勝利」

建設業界では、地域をつくって、災害を防ぎますが、スポ少では【人の正義をつくって犯罪を防ぐ】役割を担っていきたいと思います。

今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

編集後記

十数年振りに知覧を訪れた。

今回初めて、「特攻の母鳥浜トメさん」の資料館『ホタル館』に足を運んだ。資料館と呼ぶにはあまりにも小さな建物ではあったが、入った瞬間言葉を失った。展示されている写真や手記、当時の生活道具などの一つひとつに御霊が宿っている。そして物凄いエネルギーを放射しながら我々に迫ってくるのだ。

「今のお前らに、本当にこの国が守れるのか？」と。

「特攻」という行為そのものは、当然非人道的行為であり、いかなる理由があろうが許されるべきものではない。しかし、国家存亡の危機が迫る中、国のため、故郷のため、家族のため、そこへ身を投じていった若者一人ひとりの魂は、実に清らかで純粋であったに違いない。

その潔い精神性は、時代がどんなに変貌しようとも、個人がいかなる状況下におかれようとも、永遠に変わることのない、いや、決して変えてはならない日本の大切な文化であり、まさに「日本人の日本人たる所以」がそこにあるのだと強く感じた。

部会長がよく口にされていた言葉。

「我々人間はケダモノとは違う」

この言葉と、当時の青年の魂、どこか繋がっているように思えてならない。

広報委員長　山　口　　弥